水牛通信　毎月1回10日発行　1985年4月10日発行　通巻69号　1980年5月23日第三種郵便物認可

水牛通信

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

女はこわい　男はつらい　ユーイチ　2

木島始詩集　16

秋山さん裁判について　8

わが愚行　津野海太郎　22

いま、フィリピンで　桐谷夏子　9

フィリピン芸術家の逮捕にかんする声明　15

編集　津野海太郎

VOL.7 NO.4
毎月1回・10日発行
定価200円

女はこわい男はつらい

ユーイチ

●ぼくの恋人編

保育園のときからいっしょやからね、もう七年やね。でも好きになったのは一年生のときかな、サトーさんは陽気で、わりとぼくにやさしかったから、ちょっと好きになってしもうた。

ライバルもおおかったよ。すごいもん。ほとんどケンカしてた。四年生のときは、ぼく、サトーさんといちばん近い席だったんよ。みんなうらやましがってな、「ええね」とかいうわけ。ほんとよかった。でもな、みんな友だちが土曜日には佐藤さんと遊びはるんや。バレンタインもらったとか、もらってへんとか——「おれサトーと遊んだぞ」とか、「お前、遊べへんのか、かわいそうやね、きらわれてるんとちがうけ」とかいわれるやんか。くやしいから、こっちも「へえ、お前、ようきらわれんと遊べるね。わりともてるんやね、その顔」とかいってやるんやけどね。

バレンタインのとき、ぼくはもらってへんのやけど、ホワイト・デイにあげてん、サトーさんにホワイト・チョコレート、十二個ほどはいってる……。ほら、三月十四日。男が女に返してあげる日。ぼく学校いってるから、お母さんにたのんで買ってきてもらって、「これあげる」いうたらな、「ありがとう」っていってた。

サトーさん、わりと顔かわいいよ。身長もわりと高くてな、やさしい。ネアカで元気がいい。ケンカすると男よりこわいんやけど、みんな、そういうもんやって我慢してるんや。女の人の、ええ方のリーダー。友だちがいっぱいいるんよ。

三歳からずっといっしょやったんやけどな、五年になって組がちがうようなった。でもな、五年になると、みんなひやかすんよ。ぼくが便所で小便してたら、女の人まで「きた、きた」とかいうて、ぼくの手ひっぱって女便所につれてこうとするんよ、「佐藤さんが手洗い場で手を洗ってるから、早うおいで」って。そしたら佐藤さんが「どうした？」ってきかはるやんか。ぼくははずかしいさかいに、「いうな、いうな」って、その人の手ひっぱって男便所まで逃げこむやんか。ふつうそんなこと男がすることやないやん。そしたらその人、「たのむから帰して」いうてな。フッフッフ。

みんな五年となると、どういう人でも、よう人を好きになるね。恋人やら、できてくるやろ。かげでコソコソしてる人もいる。

「じゃあ、佐藤さんはきみのこと、どう思ってるんだよ？」

それがわからへんから苦労してるんよ。「ぼくのこと好きか？」てきいたけどな、なにもいうてくれはらへんのや。さっさとあっち行ってしまうんや。きらわれたんとちがうよ。みんなにたいして、はずかしかったのかもしれん。

小さなときはよく家に遊びに行ってたんやけど、もうこのごろは行かへん。だから、スポーツ教室に行こうかなと思って——その人、バレー部にはいってはるから、ぼくも陸上にはいると、二時間のこれるし、帰るときがおなじやろ。顔が見られる時間が長くなるやん。つい最近やけど、運動会のために児童会の旗つくるんで、ぼく委員に選ばれてな。幸運やったよ、佐藤さんがやっぱり学校の仕事やってたんよ——二時ぐらいから五時ぐらいまで、ずっといっしょやった。うれしい、ほんと。「おみやげや」いうて、学校に生えて

るザクロとってあげてん。学校の管理人みたいな人に「とっていいですか？」ってきいてな、ええっていやはってんか。思いきって八人ぶんとってきてさ、みんなにあげたんよ。佐藤さんには特別にな、ザクロの大きいの、お尻のとこ割れてんの、あげたんや。甘くて、おいしそうなの。みんなにはちょっと貧弱やけど、直径五センチぐらいのしかあげへんかったね。

そんとき女の人ばかりで、男はぼくひとりやった。女っていうのはな、かずがおおいほど狂暴になってくみたい。男ひとりだったら、いじめたくなるやん。すぐいじめられる。ぼくがなにかいうとな、「あんなコマドリみたいにさえずっとるの、ほっとこう」いうて。でも、ぼく、そんなにしゃべらへんよ。五年になったら、もうしゃべらへん。

そんなやから、もうみんな気がついてると思う。廊下ですれちがうときなんか、わざわざぼくのほうからぶつかってくもん、「ゴメン！」ちゅうて。ガッハッハ。　運動会のときな、ぼくは放送委員いうのでな、雨ふってきて、いろいろコードはずさんとショートするやん――パニック状態で走りまわってた。あっちは児童会の本部役員で片付けがたいへんやん。もうすれちがって、すれちがって、すれちがって、よう顔見れたよ。ほんでな、ぼくの組から出てた本部役員の女の子がいるんよ。タヌキっていうんやけどな、その子が「うらやましいことない？」ってきかはるやんか。「うらやましい」いうたら、笑わはんのや。「佐藤さんにいうといてあげようか？」「ええわ、ええわ、いわはんといて。自分からいうさかい」ってな。フッフッフ。

●女はこわい編

ええとね、これ、ぼくのいちばんイヤな思い出なのです。五年生のある日のことです。男の人がただひとり女にやられていました。それ見て、ぼくが「そんなこと、しんとけや」いうたら、女が、こんどはぼくを追いかけてくるんよ、集団で……。

ぼく、逃げ場をうしないました。そして、どうしようもなくて、男便所にはいりました。土曜日の一時半で、死ぬほどお腹へってたのに、十人ほど、集団でよってたかって、二時ごろまでズーッと張り込みされてん。たまんなくなって便所からでた途端、ひっかいたり叩いたり、踏んだり蹴ったりされて――ぼく、こわくなっちゃった。だって抵抗できひんのやもん。十人も、かこんでいるんよ！

「お前らがいたら、戦争かて勝つぞ」いうたら、

「あんた、もういっぺんいうてみいし。

ちょっと、こっち来よし。あんた、そんなこといっていいと思ってんの。はよ、あやまりいな」

といってな、こわいの。それで、こんどは階段のほうに逃げたら、また追いかけてくるんよ。ぼくとこの校舎、階段が二つあって、その一つのほうへ逃げたんやけどな、相手は十人もいるやん。どの階にも、女の人がいんねん！

三階あってな、だから全部で六か所はりこみしてんの。もう、ホント、ぼくが「戦争勝つ」ちゅうたのが、あっちは腹たったのかしらんけど！

「男の子はたすけてくれないのか？」

だって、先生が「女に抵抗したらあかん」ていやはるから。女の子はな、ちょっとしたことですぐ悪い症状がでてくるから、暴力ふるったらあかんって。だから男は我慢しとるんやけど、女は平気で暴力ふるいよる！

女対男で雪合戦やったときな、きつい玉がいっぱい当たったらしくて、女があつまってきて、二、三人ずつ、ぼくらのお腹の上にのっかるんよ。「息ができひん、息ができひん！」いうたら、こんどは顔おさえて、みんなでオチンチンをボコボコ蹴ったり、なかに雪玉いれたりするんよ。四方からとりかこんで、ヒジで叩いたり、ひっぱたいたり、好きなことするんよ――ぼくの友だちでそういうふうにやられてな、背中の骨がずれて、一週間、背中にギブスはめてきた子もおる。

ぼくも、ちょっと鼻血だしたことある。えりクビつかんで、ゲンコツを背中にふるってな、お腹をヒザでボコッと蹴られはんねん。頭をパチッと叩いて、それから「行こ行こ」って帰っていきはんねん。凶暴だよ。からだは小さいんやけど、力は一人前や。

女たちの眼と眼があって、こっちをギロッとにらんだら、もう覚悟しんとあかん。で、口で対抗しようとしても、対抗しかえしてくるんよ。ひとりを口でいじめるやん。すると十何人が、いちどにボワーッと口でおそってくるんよ――ぼくのクチビルが厚いから「タコ！」とか、眼がはなれてるから「ヘンタイ！」とか、もうコワイコワイ。

体操の時間で体操服に着かえるやん。そのとき「あんた、見んといてや！」って、筆箱ほおってきたり、ケシゴム、頭にぶつけたりするんや。「ちょっと待ってくれ、話せばわかるから！」っていってもだめ。とくに水泳の時間。こわかった。男はいちはやく休み時間に着がえてしもうて、教室から廊下にでてしまうんや。女があとからはいって、ドアをガタンとしめるやんか。それから先生がきやはるまで、男はズーッと廊下で待ってるねん。先生がきや

はったら、もうそろそろええやろうと思って、はいるねん。

女にはデリケートという心がない。いまは男のほうがデリケートやねん。それから女は団結力がつよい。男はバラバラ――みんな特徴があって気があわへんからな。せいぜい二人やな、団結しても。せいぜい二人や。こわいわ、女は。

先生のまえではおとなしくてな。すごくかしこいよ。ただ、ぼくらには日記を書くって手があるやん。男は日記つかって先生につたえるんや。あれがなかったら、ぼくら、もう生きてへんやろね。でも、ばれたら大変だよ。フッフッフ。さっきの雪合戦のときケガした子な、その子が早退きしたあと、先生が背中にのった女の子三人を呼んだら、その子ら、「だって、あの人らが固い固い雪玉ほおってきて、わたしらのホッペタに思いっきり当てはるんやもん」て泣くだけ泣いといてな――そのあと、ぼくらのほうをギロッと、すごい眼で見るんや。

ぼくがなにもしてなくても、ぼくがやったと思えば、とことん思いこむ。一方的に思うんよ。こっちのことをきいてもらおうと思っても、ちっとも話きいてくれへん。SとSの磁石みたいにバッと反対してくんのよ。もう、すごい磁石！――一ミリでも近づいたら宇宙のかなたまで飛ばされちゃう。こわいよ、女。

「サトーさんはどうなの？　彼女も、そういうことするの？」

する人にはするし、やらへん人にはやらへん。サトーさんもつよいけど、女の、ええほう……やと思う。なにしろな、男にはココロがあるから、そのぶん弱いんよ。つらいんよ、男は。

●でも、やっぱり編

ぼく、キスかて保育園のときやったもん。みんなやってんのやで、保育園のとき。「結婚ごっこ」とかいうてな、だれかさんが神父さんになって、男と女でな、三人で組むねん。「キスをしなさい」と神父さんがいって、ようそんなことやって遊んでたんよ。でもそのときはただの遊びやったから、ドキドキとかせえへんかった。

四年の学芸会のときな、サトーさん、王さん、やらはることになったのや。劇の前半と後半と、ふたり王さんがいるんや。サトーさんは後半の王さん。で、ぼくも前半の王さんになるかもしれんやんか。そしたら上着は、どっちかがつくって、どっちかに貸してあげるのやんか。どっちにしても、ええことやん？　こっちが貸してあげても、

あっちが返してくれんのやし、あっちが着てんのを、こっちが着るんやから。そしたら「あんた、三年のとき王さんしたからな、ほかの人にしなさい」いわれてな。風邪ひいて一日やすんだら、クラスのやつ、勝手にぼくの配役きめてやんの。王さんじゃなく悪い男の子。オモチャをボロボロにする不良みたいなの。もう腹立ってな。

先生も知ってるよ。その子、サトーA子さんていうねんか。それで算数のプリントにな、「A子さんはサトウ三〇〇グラム買ってきました。家にあるのは六五〇グラムです。あわせて何グラムでしょう？」とか、そういう問題を書かはったん。「あき子さんて書いてあるよ。がんばってやってや！」って――いまの五年の先生。みんなが、「ワーッ！」といって、こっちはだんだんちぢんでいくの。もう真赤や、顔。

妹のアイコ七歳「アイコはね、スズカ君が好き。だって、かわいいねん！それでな、スギモトさんという人とフジイさんという人にな、『男の子でだれがいちばん好き』てきくんやな。三人とも、スズカ君なんねな。『いちどスズカ君にきいてみようか』ていうんやけどな、いうチャンスがないねん。スズカ君、いつも一番に学校にくるんやけどな、そいで二番に行っていおういうんやけどな、もうみんなきてはんねんな。学校がおわったときもな、『スズカくん、遊ぼう』って男の子がきやはんねん。ユミちゃんとな、『いうチャンス、なくなったやん。どうすんの？』というねんやな。『まだ明日があるやんか』ってな」

お兄ちゃんとおなじ道たどっとる。フッフッフ、やっぱりぼくと似とるよ。

秋山さん裁判について

「水牛通信」の昨年十二月号に掲載させていただいた桜庭章司さんのお手紙中に秋山芳光さんの裁判にかんする、「今、死刑を上告中で、今年中には確定するようです」という一行がありました。

秋山さんは実兄の虚偽の証言によって実兄が計画した知人の殺害計画の主犯とされ、その他、いくつかの事実のデッチアゲの上にたって、二審で死刑判決をうけました。目下、上告審で真相をあきらかにし、この死刑判決の破棄、差戻裁判の実現をかちとるべく、そのためのたたかいがつづけられています。万が一にも上告棄却された場合は、再審要求のたたかいがはじまります。

いまも秋山さんの死刑を確定させないためのたたかいがつづいている。その事実を肝に銘じておきます。秋山さん、もうしわけありませんでした。ていねいな確認ぬきでお手紙を掲載させていただいてしまった桜庭さん、ごめんなさい。

いま、フィリピンで

桐谷夏子

――ちょっと聞いたんだけど、つい最近、フィリピンで、リノ・ブロッカとベーン・セバンテスが逮捕されたんだって？

もっとたくさん。ティーンエイジャーの子たちも、おおぜいつかまったの。

――いつ、それ？

一月の下旬――二十九日か三十日だったと思う。それで二月のはじめに声明文をだしたわけ、「コンサーンド・アーティスツ・オブ・ザ・フィリピンズ」という組織が。なんて訳すの？　ええと、「社会的関心をもつフィリピンの芸術家たち」？

――なぜやられたの？

直接の理由はね、一月下旬に、マニラ

周辺の交通機関のゼネストがあったのね。ジプニーだけじゃなくて、交通・運輸機関ぜんぶ――それに積極的にかかわったという理由だったみたい。

リノ・ブロッカにしろベーン・セルバンテスにしろ、戒厳令以後、ずっと沈黙をまもってきたんだけど、アキノ暗殺のちょっとまえぐらいから、さっきの「コンサーンド・アーティスツ・オブ・ザ・フィリピンズ」という運動体を組織して、活動をつづけてきていたのね。ここ二年間ぐらいは、二人とも、みんなが「ありゃりゃ」っていうほど、ラジカルにやってたみたい。

――なんで「ありゃりゃ」っていうんだい？

えーとね、それまではリノにしろベーンにしろ、直接、あまり表面にでなかったでしょ。

わたしはベーン・セルバンテスのことはよく知らないんだけど、リノのばあいだと、PETAの内部でも、あの人、ずいぶん大人になっちゃったなって感じだったわけ。

――リノは、PETA、つまりフィリピン教育演劇協会のリーダーなわけだろう、いちおう。演出家で有名な映画監督で……。

そう。でも、ここ四年か五年のあいだはですね、黒テントのツノさんのように、つかずはなれず……フッフッフ、実践はですね、日本にも何回かきてるソクシー、マニー、ガーディを中心とした人たち――要するに一九六〇年代の後半にPETAを組織したときのいちばん若い世代ね――かれらがPETAを運営してたのね。だから「バッジですねえ、リノは」とか、よくそういわれてた。

――バッジってのは、ああ、シャッポか。ただの帽子だってのね。

うん。でも、この二年はね、ほんとに小さなデモンストレーションにも、おもてだって顔みせるようになったの。一九八二年にアメリカにながいこと行ってて、帰って一年後にアキノが殺されたでしょう。それからみたい。

リノは芝居の演出家としてよりも、フィリピンのなかでは、映画監督としての名声のほうがすごいのね。はんぶんドキュメントみたいにして、『マニラ・光る爪』とか、スラムを中心にした民衆の生活をえがくっていうことで有名なの。

――きみは見たの？

見ました、何本も。

――おもしろいの？

うーん、フィルムとしておもしろいかどうかよりも、それを見てると、まさにフィリピンとはこうだなという気にさせられる。でも、ちょっとシャカイシュギ・リアリズムみたいなとこがあるよね。

――ベーン・セルバンテスの方は、むかし「水牛」でも、かれの書いた『民衆のミサ』とかの芝居を紹介したりしたことがあるんだけど、いまはフィリピン大学の先生だね。むかしみたいなラディカルな芝居は、もうやらなくなってたの？

あたしがはじめに行ったころは、演劇運動家というよりも、タガログ演劇の長老という感じだった。

かれにも、なんどか会ってますよ。いちばん最近は、去年の暮れの「マキイサ」のとき。「マキ」は「トゥ・ビー」で、「イサ」は「ワン」だから、「トゥー・ビー・ワン」――だから、まあ「団結しよう」っていう意味だと思うけど、そういう名前で、PETAが主催して、フィリピン全島からコミュニティ劇団とか学生劇団があつまって、一種の民衆文化祭をやったの。毎夜毎夜、五つか六つのだしものを用意して――。

そこにベーン・セルバンテスが、フィリピン大学の学生たちをつれて参加してきたのね。

ほかのだしものにくらべると、たしかにソフィストケーテッドされてたわね。ちょっと京劇みたいなの。で、部分部分で、クラシック・バレエみたいな赤シャツをきた兵隊さんがバッとでてくるわけ。それで象徴的な動きしかしないのね。ひとをワッとつかまえるときは、そこだけスローモーションにしちゃうとか――「へえ、あれがホントにベーン・セルバンテス？」って感じで見てた、ゲンさん（山元清多）といっしょに。

――ふうん。そういえばゲンさんだったな、「水牛」で『民衆のミサ』を訳してもらったの。

フィリピンでは、一つ一つのだしものあと、かならず評価とか検討の時間が用意されるの。ベーンたちのときも七分間ぐらいのショーがおわったら、観客がものすごく神経質になっちゃっててね、どんどん、ものすごい質疑応答がはじまっちゃった。

「ベーン、あなたは一九七二年の戒厳令のまえにも、まったくおなじロジッ

クで、まったくおなじ演出をなさってたけど、十何年たって、社会の変動にもかかわらず、なぜあなたの演劇はまっく変わってないのですか？　いまは民衆的な運動がフィリピン全島にまきおこってるのに、あなたはちっとも変わってない」

そういって、若い社会活動家や演劇人たちがガンガン批判してた。

たしかにちがう水準なのね。やってる人たちのリアリティがないっていえば、たしかにないの。農民や労働者や軍隊もでてくるんだけど、それがどれもパターン的になっちゃってて。

――ベーンもリノも、えらくなりすぎて、ちょっと浮いちゃってたということか。それがアキノ暗殺後、もういちど現場にもどってきたと。そして、もどってきたとたんに、ばくられてしまったと。

たださ、アキノが殺されたとき、さっきいったソクシーとかマニーとか、ＰＥＴＡの活動家たちが何人も日本にいたじゃないか。ニュースをきいて、いや、アキノなんかイシワラ・シンタローの友だちだ、どうってことないよって、平然と六本木のディスコかなんかに行ってたろ。それが帰ってしばらくしたら、とたんに活動がはげしくなった。あれはどうしてだったのかな。

フィリピンのなかでは、いろんなレベルの反体制運動があって、上流階級もふくみこんで、とにかくアメリカン・デモクラシーにフィリピンを近づけようという運動も、ひじょうに根づよく大きなものとしてあるのね。

そういう運動も、それから本当に底辺の人たちの運動もふくんで、ＪＡＪＡ――「ジャスティス・フォー・アキノ　ジャスティス・フォー・オール」っていう組織をつくったわけ。そこに、いまのフィリピンの体制はまちがっているとかんがえる人たちが、大挙してあつまってたのね。そりゃあ上流階級の人たちは「ジャスティス・フォー・アキノ」で、こちら側の人間は「ジャスティス・フォー・オール」だけなのかもしれないけど、ともかくＪＡＪＡって組織をつくったことは、ものすごく大きな運動のひろがりなの。

生活におわれてる人たちが政治の改革をはじめるには、ひとつのステップが必要だっていうことなんじゃない？　それでアキノの事件を、わりと有効につかってみたということだろうと思うんだ。それまで分断されてたフィリピン中の運動があつまって――だからすごいのよ、あの運動は。

――そうした運動のなかで、ＰＥＴ

Ａはどういう活動をしてたの？

一九七〇年代にも、関心のある人はやんなさいということで、いろんな集会で即興劇なんかをジャンジャンやってたの。

そのほかに、舞台表現にしか興味のない人たちもたくさんいたの、ＰＥＴＡのなかには。それにリノ・ブロッカが有力な映画監督だから、かれにたよって映画俳優になりたいって人たちもいたしね。『赤と黒』じゃないけど、田舎の優秀な青年が貧困から脱出するためには、それこそ、お坊さんか芸能人になるしかないって状態があるからさ。そういう雑多な人たちが、おもしろいアンサンブルをつくってる組織だったの。だから政治集会やデモに参加する人たちも、いちいち、われわれはＰＥＴＡそのものじゃなく、ＰＥＴＡの一部ですよと、ことわってやっていた。わたしはＰＥＴＡです。でもＰＥＴＡじゃなく、わたしが参加するんですよって。

それがね、去年の九月のＪＡＪＡの最初の集会では、はじめてＰＥＴＡ内部で意志統一をはかって、ＰＥＴＡという名前のはいったプラカードとタテカンを用意して、ぜんたいで参加したの。そのプロセスで、十何人かのメンバーがやめてったみたい。

――こんどの逮捕は、そういうふうにつづいてきた運動にとって、かなり大きなできごとなの？　いちばんでかい弾圧なの？

アーティストにとっては、ね。いまから三年まえかな、カール・ガスパールっていう人が、ミンダナオ島でつかまってるんですよ。かれはＰＥＴＡの演劇ワークショップを、もうちょっと社会活動むきに変えた人なの。そういう事実はあるけど、ただ、これだけ大量の芸術家が、それもリノとかベーンみたいな有名な人をふくめてつかまったのは、はじめてみたいね。

――そういえば、去年、ＰＥＴＡの本拠が火事で焼けちゃったじゃないか。あれは……？

そうなの。八月二十七日。マニラからちょっとはなれた、ケソン・シティというとこにあったんですけどね。

はじめはフィラモ・ライフっていうアメリカの生命保険会社が劇場をもってて、そのホールの一角をベニヤでかこんで事務所にしてたの。まずそこを追いだされて、つぎに大きな一軒家を借りたんだけど、そこも家賃がはらえなくて追いだされちゃった。焼けたのは、そのまたつぎに借りたとこ――友

人たちがきたとき泊まる部屋とか、ちょっとした運動ができる空間もあってね。レジデンス・エリアだから、まわりはふつうの家。

——へへえ。じゃあ、日本で借りたら何十万もするような……。

そこが焼けちゃった。公式の発表では漏電ということになってるけど、いくつか不明な点があって、「まあ、放火じゃないの」っていう感じなわけ。PETAにはいつも「あなたのためにドアはあけてあります」っていう標識がかかってるんだけど、そのとおり、いろんな人が、いろんな目的のために出入りしてたから。

焼けちゃってからは、分裂した古いメンバーもつぎつぎに焼跡のテントをおとずれたらしいけど、そのなかに、ただひとり、すがたを見せない人物がいたと。名前はさしひかえたいけど、かれは火事の数日まえからゆくえがしれないと。まあ、ただのウワサかもしれないけどね。

そのあと、そこからワン・ブロックほどはなれたとこに、地下室を借りたんですよ。ところが、ちょうどPETAが『ヌクリア』っていうヒット・ミュージカルをやった直後だったんで、あの火事、放火かもしれないよというウワサがマニラ中にひろまっちゃったの。それで、その地下室の家主の、PETAとも関係のある組織が恐怖におののいて、ひっこしちゃったの。おかげで、もとの家よりも大きな、もっときれいな部屋がたくさんある一軒家が、PETAのものになっちゃったの。それで、いまやガードマンをやとったりしてね、ハッハッハ。

——フフン。で、この呼びかけは、PETAから黒テントに送ってきたわけ?

そう。とくになにかをしてくれっていうんじゃないの。PETAにはね、去年の暮れ、ゲンさんたちとむこうに行ったとき、秋葉原でピアノとかアンプとか買って、もってった。なにしろ火事で、なにもかも焼けちゃっさたのよね。みんなからカンパあつめて——あ、カイちゃんのも、うけとったよね。

——そうですよ。しかし、そんな立派な家がすぐ手にはいったなんてきくと、ちょいと撫然としないでもないな。よしと、じゃあ、この声明文も、きみの話といっしょに「水牛通信」にのっけとこうな。

きょうはありがとう。なにもありませんが、オデンでも食ってってください。焼酎もあるよ。

一九八五年二月十一日、CAP（コンサーンド・アーティスツ・オブ・ザ・フィリピンズ——この状況を憂慮するフィリピン芸術家集団）は、以下のような声明を発した。

●

CAPは、一月二八日の交通ストライキとの関連で無差別に逮捕され、不当に告発された。CAP議長リノ・ブロッカ、CAPスポークスマンのベーン・セルバンテス、映画制作助手ロサウロ・「ボーイ」・ロック、俳優のドミナドール・「ジュン」・リサレクション三世とロニー・ライゴその他の多くの人々が、いまだに拘留されつづけていることに抗議する。

ブロッカとセルバンテスは、終身禁固または死刑を課されることもありうる非保釈罪で告発されている人々のうちに入っている。さらに悪いことに、かれらは予防拘束措置をつきつけられている。この措置のおかげで、かれらは実質上、裁判所の保護をうけることができず、大統領の自由裁量の下におかれている。大統領だけが、かれらを釈放する権力をもっているのだ。さらに、たとえロックやリサレクションやライゴその他の人々が保釈保証人をたて、裁判所が保釈命令をだしたとしても、予防拘禁措置は、かれらをさらに獄中にとどめておくことができるのだ。

ブロッカやセルバンテスやその他の人々にたいして、このような措置がとられているということは、この独裁政治の下にあっては、正義は二重の基準によっておこなわれるということを暴露している。民衆のたたかいを支援している芸術家や文化労働者たちは獄にほうりこまれ、保釈されることもなく重大犯罪で告発され、怪物のようにでたらめな予防拘禁措置によって抑圧されている。一方では、二重の殺人のかどで告訴された軍人たちが、保釈保証人をたてることを許され、拘置所が満員だということで収監されることもないままだというのに。

われわれは、正義がこのように二重の基準をもっていることを告発するとともに、リノ・ブロッカやベーン・セルバンテスやその仲間の人々を即座かつ無条件に釈放することを、かれらに対するすべての告発をとりさげることを、かれらに押しつけられている予防拘禁措置を廃止することを要求する。そしてわれわれは、われわれの仲間の芸術家や文化労働者が、独裁政治がとったこの最新の措置におじけづいて沈黙することなく、芸術家としての、市民としての諸権利のためにたたかいつづけることを、民衆の正当なるたたかいを支援しつづけることを要求する。

木島始詩集

「くらべっこのうた」

いばるな
のさばるな
地球のたから
くすねて逃げる
はびこり成り金くんたちよ
きみらの妙ちきりんさ
くどくどあっくどく
わざわざあっざわらおうと
なんでもかんでも
いじめたがってる

いじわるいっぱいうようよさ
あきらめたほうがいいぜ
ぼんくらのこの宇宙人ちゅう
平凡人のぼくに勝とうなんて
いやはや何が百発百中だ
のっとり名人め
射撃の的はずれっこなしか
勝負ごとの達人め
棒高跳の鳥人め
学問に精進する完全人の聖人くん
どいつもこいつも人を抜きんでる
天才なんてな　くさすぎるわ
こういう非凡人の誰ひとりとして
かなわんなと言わんもの
ありえない　ぼく流の試合で
青空の一点めがけて飛びながら
雲の熊手に　ざんばら髪あてっこする
あたりまえさ　くらべあったらばな

「ぴゅうんせんせい」

三ばのコスズメが
でんせんで　おしゃべり
ぴくぴくしてる　くろい
あなあきぼうの　むこうはしに
おとこの子の目　じいっと
どうも　じぶんたち
見ているらしいと　きづくなり
一ばんめが　いった
「あのあな　なんだ　ちゅちゅん
こわいなあ」
二ばんめが　いった
「なにか　なげそう　ちゅっちゅ
にげようか」
三ばんめが　いった
「そら　こわいもんか　ちゅっ
とびだそや」
バン——
ぴゅうん！
あなから　すごい
こわいのが　おしえこんだ
三ばのコスズメに
とびちりかたを

「にんげんのにんき」

いきものなら　みんな

いいなりになるさと
にんげんくん　じしんたっぷりだが
にんきが　ちょいと　しんぱい

ほめてみな　よけりゃ
ほうびをやろうと
にんき　ものにしたくて
にんげんくん　きまえいい

つばさひろげ
ゆうゆう　みおろし
ワシは　ただ
くびを　かしげた

おり　にらみつけ
ライオンは
そっぽむいて
おおあくびした

ほめるところなんて
みつかるかしらん

つぶやいたのは
ひらひらチョウチョ

ほうびでつられると
ろくなことないよと
ドジョウは　どろに
もぐってきえた

●

「無人小屋」

目をかすませて
鳥が迷いました
だれかいませんか

屋根はいいました
わたしは屋根です
眠いですねえ

壁はいいました
わたしは壁です
冷えますよ

机はいいました
わたしは机です
飢えています

椅子はいいました
わたしは椅子です
不意すぎますよ

籠はいいました
わたしは籠です
待つだけです

目をぱちぱち
鳥は思いました
どうもありがとう

●

「おにがわらくんへのうた」

らいねんか
さらいねん
なまけおにが
わらうころ
わからんかい？
かわらん
わがままが

こわれちまい
やわらかい
かわらでいると
らわんみたいに
まがりやすくなく
ひびわれやすくなく
くねくねしない
こわいいかつい
わらいがおを
こころのころがる
てっぺんから
かけらいっぱい
くわされるんさ
それでなんだな？
けろけろけろりっと
にがわらいしてるのは
おにがわらくん

●

「さんにんめのぼく」

せんぞのなまえ
おもいだせんから
わすれものなんか
いちいちひろいに
いかないよ　と

ひとりぼっちで
くしゃみしながら
さんぽにむちゅう
だがどこかしらで
すぐまいご

それこそぼくの
なんじゃろなくん

とくっつきばなしの
もひとりのこわがりくん
それに　くちうるさいもひとりくん

だがさんにんそろっていても
こころぼそいんだって　さ

●

「みうちのしうち」

ぬげない
てぶくろに
こまりはてる
おふくろを

いやみな
おじぎで
たすけない
おじき

おしばいが
むすめや
むすこのまえで
おしまいにならん

と　いきなり
きなくさいこえで
「きさまら
きざすぎら」と

おやじが
やじられたら
おやおやっ
おやじきょうだい

じょうだんなのに
だいじょうぶかな
きゅうに
やおやのきゅうりみたいだ

●

「ぶつくさ」

なにかに
ぶつかったとたん
なにかを
ぶっきらぼうに　ぶっぶっ
なんべんも
ぶっぱなされつづけ

おもわず
つぶやきました

ぶっださま
このままじゃ
ぶっそうです
このままじゃ
おだぶつかも
どうか　こいつ
ぶったたいてください
このなにか
ぶつぶつ　ぶっとばしてくるものを

●

「磁石のうた」

ひとの心には北極星を
ふり仰ぐ磁石があって
ことばたちを吸いよせてくる
とくべつ感じやすく生きいきと
引きつけられやすいことば
まるでふりむきもしないことば

それともこんがらがる
ことばたちのほうが
いざ遠くを望みみる
心がやってくると
向きをかえだし
並びたがるのかな

さそいやめない
星座の瞬きに
よみとれない
古代の文字のつらなりに

きっとかくされた
謎の約束がある
とそう感ずるのが
ぼくの磁石のはたらきだ

ぼくの心がはこぶ
見えない磁石はいつも
どこへ行こうと
闇に押しこめられ
さんざ踏みつけられ
息たえだえのことばたちを
しかと結晶のかたちに
葉脈のうねりに
光る眼差しに
よみがえらせ
たがる

わが愚行

津野海太郎

「ひとりぐらしの人間は、ひとりで我慢することになれてるんだよ。ひとりで部屋にとじこもって、じぶんの舌で傷をなめることしか、痛いのをなおす方法を知らんのね。それはそれでいいんだけど、なんとなく、それがただしい生き方だと思いこんでるふしがある。そんなこと意識してるわけじゃないよ。でも、たしかにあるんだね。そういう意識というか無意識というかね。ひとにたよりたくないとか、苦しいことはひとりでがまんして、じぶんだけの力でそこから抜けだすとか、そういうのがあるんだよ。

このあいだ、とつぜん左の足首が痛くなったときもそうなのね。おれの場合、ちょっと極端すぎるかもしれないけど、じぶんでネンザだときめこんで、医者にもいかない。医者、きらいだから。友だちにSOSの電話をすることもしなかったしね。ダンボールをL字

型に切って、それをテープで足首に固定して、そのままじっとしてれば、四、五日でなおるだろうと思ってた。

そのネンザ治療法は、たまたま用事があってたずねてきてくれた戸井十月にきいた。そんな気のきいたこと、おれが知ってるわけないよ。ジューガツはバイクでネンザなれしてるからね。かれが薬屋にいって、一式、買ってきてくれた。

かれといっしょに、風間さんというオフ・ロードのオートバイ乗りがきて、砂漠で死にかけたときのことをはなしてくれた。死を「死」ということばでかんがえるとこわくなるけど、立っているからだがゆっくりゆっくり低くなっていって、いつのまにか地面とおなじになってしまう——そのときはそういうふうに感じてたから、すこしもこわくなかったっていうんだよ。そのイメージが、とりあえず、よく納得できた。おれの自助論にはコッケイなところがあるなと、すこし感じはじめた。はじめて会った人。若いけど、なかなか独特な人だったと思う。

ところでさ、これはネンザだと自己診断したのはいいんだけど、いつどこでどうネンザしたのか、そのいきさつがぜんぜんわからないんだよ。

そういえば痛みがはじまる前の晩、渋谷でユージとハルナさんのデュオがあって、そのあと麗郷ですこし飲んだ。だから、あの晩、自分でも気がつかずに足をくねったかして、それでこうなったんだろうってムリに理由をくっつけた。でも、そんなに酔っぱらってなかったはずなのに、おかしいなとは思ったんだけどね。そうしたささいな矛盾はあえて無視して、じぶんの診断にしがみついてたわけだ。

晶文社の連中が、それ、きっとツーフーですよ、といってくれたんだけど、ちがう、おれはまえにやったから知ってるけど、これは絶対にネンザの痛みだ——と断固として否定した。おかげで、あとでバツのわるい思いをすることになったんだけどね」

●

黒テントの桐谷夏子が高橋太郎といっしょにやってきた。タローのかいた芝居を作業場で上演するので、それについてなにかかくようにというのだが、とても原稿がかけるような状態ではない。しゃべって、それを起こしてもらうことにした。タローは二十二歳。こっちがしゃべるのとひきかえに、桐谷にも、いまのフィリピンについてはなしてもらって、それを「水牛通信」に

のせることにした。

「タローの芝居では、おやじが世界のはじまりの物語にこだわって、むすこの方は世界がおわる物語にこだわってるのね。こだわってるっていうか、生きていくための自分の物語がどうしても必要な人たちなんだ。

父親は、支配者としての自分の根拠を世界の始原神話のなかにさがす。父親を殺した男が世界の最初の支配者になるっていうのは、ヘシオドスの『神統記』。おやじのウラノスを殺したクロノスを、さらにそのむすこのゼウスがやっつけて歴史がはじまる。それにかたどって自分の物語をつくることで、あの父親は治者としての自分の位置をたもちつづけようとするんだね。

反対に、むすこの方はおれの爆弾で世界をぶっとばすというアナーキストの伝説に自分をとじこめている。あの女にしてもそうだよな。自分の存在を正当化する物語を自分でつむぎあげて、その物語のマユのなかにとじこもっていないと、ハダカのままではこわくて生きていけない、そういう人たちなんだろうと思う。

しかし、いくら自分で自分の物語のマユをつむいで、これこそが世界だ、おれだけじゃなく、おまえたちもこのマユのなかで生きているんだといいはっても、おなじことを別のやつらも主張してるわけだからさ。それなのに、おたがいに相手を自分の物語のなかに強引にひっぱりこもうとするから、ケンカになっちゃう。

おれたちもそれぞれに自分の物語をでっちあげて、そのなかで生きてる。そのほかに生きようがないというのはたしか。おれはおれの物語のなかで生きてるし、タローはタローの物語のなかで生きている。それはたしかなことなんだけど、同時に、自分の物語で世界をおおいつくすことなんて絶対にできないんだという認識もある。「おれがこのひとことを口にしたら世界は凍りつくだろう」っていったのは、あの詩、吉本隆明だったっけ。その「世界を凍りつかせるひとこと」っていうのが、つまりむすこの爆弾だろ。あるいは父親や女がかかえこんでいる個人的な神話だろ。でも、たかが一人の詩人が発するひとことによってでは、世界は絶対に凍りつかないわけさ。

世界を凍らせるような決定的なひとこと、そのなかに全世界を封じこめることができるような絶対的な物語なんて、どこにも存在しない。あると思って充足感にひたるくらいなら、いつまでもおわらないままの不充足感のほうがいい。おれたちが自分の物語を世界のなかにとじこめようとしても、かならずそこからはみだしてしまうものが

ある。タローの芝居でいえば、となりのオバサンがそう。

父親やむすこや女が、やっきになって自分の物語で世界を秩序づけようとしてもさ、最終戦争によって世界がほろびてしまっても、あのオバサンだけは平気でその外にでていってしまうんだね。それぞれの物語をせおったほかの登場人物がみんな死んでしまっても、彼女だけは生きのびる。ゴキブリみたい？　まあそうかもしれんけどさ、ともかくも、そうやって彼女は隣人たちの物語のおわりを見とどけるわけね。もしかしたら作者は、けんめいに自分の物語に執着して親子ゲンカしたり心中したりしてるような連中の方に、よりつよいシンパシーをもっているのかもしれないと思う。もしそうだったとしても、同時にかれは、それらの物語の無意識的な批判者をその芝居の内側にセットせざるをえなかったわけだ。どうやっても物語からはみだして、せっかくの物語に割れ目をつくってしまうようなゴキブリ・オバサンを。

えーっとさ、人間の歴史には決定的なことなんて起こりっこないんだという意識が、おれなんかには抜きがたくあるね。年をとったからというだけじゃないよ。むかしからそうだもん。眼のさめるようにすごいことが起こってほしいと願ってると同時に、人間の歴史の幅なんかたかが知れてて、そんなにすさまじいことなんか起こるはずがないと思いこんでる。そういう対立する意識が、だれのうちにもあるんじゃないの？　とすると、あのオバサンは、おれたちのなかの、決定的なことはなにも起こらないという意識のほうを代表してることになる。神さまだけが自分で自分を笑うことができるという説があるけどさ、おれたちにだって自分で自分の物語を笑う程度のことはできるよ。その力のシンボルがとなりのオバサン。おれにとっては、あのオバサンだけがすくいね。

ただ冷静にかんがえてみると、おれたちはというか、アングラ以後の演劇は、片方の手で物語をつくって、もう片方の手でその物語をこわしたり笑ったりすることを、十年も十五年も、ずっとやってきたんだね。だから劇中劇というのが唯一の構造——その手しかつかえなくなってる。

こまめにさ、誠実にさ、みんなでおびただしい劇中劇をつくってきた。いささかあきてきたという気分はたしかにあるよ。ちがう芝居が見たい。やりたい。おれとしては黒テントに「物語る演劇」路線の全面的復活を希望するね。『西遊記』とかね、あそこでつかった「物語る」ということばは、おれのひとことで世界を凍りつかせたい、世界を爆破することができるという自

我肥大人の夢をものがたろうというんじゃなくて、その正反対のことをいってたわけだろう。たとえていえば、おやじもむすこも女も、詩人も革命家も青年も登場しない、となりのオバサンだけが登場する物語ね。自分で自分を笑って、いちいち傷つかないゴキブリ神さまたちの演劇がいいよ」

●

「メシは自炊。店屋もののはいちどもとったことがないの。ソバ屋もスシ屋も、だから電話番号もわからない。

しごとがあって一日おきぐらいに晶文社のだれかが部屋にきてたから、材料を買ってきてもらって、片足でピョンピョンはねながら料理してた。どこかから話をきいて、京都のハシモトが魚や米や野菜を宅急便で送ってくれた。すぐ料理できるように、ぜんぶ切ってあってね。これはありがたかった。こんどの号にのせた聞きがきは、かれのむすこの女性論。小学校の五年生だから、十一歳かな。いま子どもの話をたくさんあつめていて、それで本をつくろうと思ってるんだけど、それにつかえなくなったやつ。

あまり動けないから、しぜんに鍋ものがおおくなった。田川さんの「料理がすべて」を参考にしたりしてね。あと、まえにハルナさんに地下鉄のなかでおそわった、たった五分でできるアサリ入りの煮ヤッコとかね。

ところが、そんなことしてると、へんに充実した気分になってくる。なにしろ、あんなにながく部屋にとじこもって生活するのは、はじめての経験だったからね。しばらくのあいだは、それなりに新鮮な気分でいられた。ところが何日たっても、痛みがとれないわけよ。四、五日とおもってたのに、一週間、十日たってもなおらない。いちおうの目標をたててスケジュールをくみなおすんだけど、いちいちそれがだめになる。そのたびに、いや、ジューガツたちもいってたじゃないか、ネンザは一週間や二週間じゃなおらないものなんだ、それがネンザとなのだとじぶんにいいきかせたりしてね、こころをしずめるわけ。

痛みはね、かなりのものだった。ただ寝がえりをうつだけで、二、三分かかる。痛むほうの足をゆっくりもちあげて、そろそろと向きをかえて、下半身から、順々に全身をそっちに向けてくのね。途中でちょっとやすんだりして。でも軟体動物じゃないんだから、どうしてもガクガクするよ。イテッとかムムッとかうなりながら、二、三分かかった。

ぼくは痛みにはつよいほうで、かなりのとこまでは我慢できると思いこんでた。それがじつは、はじめにいった自負だか虚栄心だかにもとずくサッカクなんだね。痛みにつよいとかなんとかいうよりも、いくらひとりでうなってても、そばに他人という反射板がないからさ、バカみたいな話で、いまのじぶんの痛みがいったいどのレベルのものなのかという見きわめがつかないのよ。まだ我慢できる、まだ我慢できる、ひゃあ、おれはなんてつよいんだろうと思ってるうちに、とりかえしのつかないことになるタイプなんだろうね、おれは。

しごとで必要がある人のほかは、それでもまだ家族や友だちには電話しないでいた。

でも、いつのまにかウワサがひろがってくんだね。ああヒミツにしてるのはおかしい、ただのネンザじゃないんじゃないか。石山修武さんが「あんなことやってるとツノは死んじゃうぞ」といってるとか。「ネンザとかいってるけど、じつはひどいウツ病なんだ」と室謙二がふれまわってるとか。ウツ病はじぶんだろうと思ったけどね、要するに、みなさんのご意見をまとめると、あいつはふだんの生活やこころがけがわるかったから、とうとうバチがあたったんだということだったんだろうな。おれのゆがんだこころをただすために天がくだした懲罰だという説ね。まあ、そんなとこだろう。だれかがひっくりかえったら、おれも、きっとそういうだろうと思うからね。

そうこうやってるうちに、一週間たち二週間たち、もう二十日ぐらいたってからかな、ある晩、ベッドにもぐりこんで痛いのを我慢してるうちに、エンピツをボロボロに噛みくだいちゃったんだね。せめてむずかしい本をよんで痛みをごまかそうと思ってさ、フトンのなかに本といっしょにもちこんでたやつ。おしりのとこがグシャグシャになって、なかからシンがでてきた。ナマリの味がした。

さすがに、これはヤバイと思ったんだね。翌朝、ついに友だちに電話して、タクシーで病院にはこんでもらった。なんでいままでだまってたんだ、とおこられた。大学のころ眼医者にいってからはじめての病院だから、ほとんど四半世紀ぶり」

●

原稿なんてかく気分じゃなかったけど、一つだけ、どうしてもかかなければならない短文があった。埋草がわりに入れておく。小生としてはめずらし

くふきげんな文章なのも、あんまり足が痛かったせいだろう。

スイッチの一押しで、あるいは数十日のキャンペーン期間がすぎると、いままでそこにあったものがもうどこにもない。コマーシャルにはいまこの瞬間しかない。その徹底的な消えものに、たくさんの金と才能が投入される。商売なのだから金は当然として、わずか一行か二行のコピーの背後に、いちいち才能ゆたかな人たちの手技の存在を感じさせられなければならない。それが辛気くさい。詩人の才能とつきあうのがいやなら、本を買わなければいい。映画監督の才能がしんどければ、映画館にいかなければいい。だがコピーライターの才能は、日々、新聞をひらくたび電車にのるたびに、むこうから勝手に押しかけてくるのだ。しかもタダで。

コピーライターのだれかれを批判しようというのではない。私はかれらの才能に敬意をはらう。にもかかわらず、というか、だからこそ、都市生活のあらゆる場所、あらゆる時間が、かれらのくりだすパンチのきいた短いことば、センスのいい文字ぐみによって埋めつくされる——そうした状態が辛気くさく感じられるのである。

コピーライターを批判するなんて、とんでもない。たとえば私は本の編集をなりわいとしている。当然、ひと月に何本かはオビの文句をかかなくてはならない。私もまた職業的なコピーライターのひとりなのだ。本にはタイトルをつけなければならない。本のなかみがおのずから凝縮されて、したたりおちるようにタイトルができあがるのではない。短いことばにそれなりの効果を露骨にあてこむ。編集者としての私は、そうしなければ本は売れないとかたく信じている。書名もコピーである。とすれば本文だって、それが絶対にコピーでないという保証はどこにもない。

下ねたとコマーシャルのもじりだけは絶対にやらない、やったらおれの負けだと思ってますと、ある若手コメディアンが週刊誌のインタヴューで語っていた。

笑いの芸人は下ねたにたよることを伝統的にきらう。それをやればかんたんに観客の笑いがとれることがわかっているからだ。かんたんすぎて、芸人としての誇りがたもちにくくなるからだ。そこに下ねたのほかにコマーシャルのもじりがくわわってきた。一九七〇年代以降のあたらしい現象だろう。かれがコマーシャル依存のギャグをみずからに禁じなければならないのは、それほどまでにふかくコマーシャルが自分の世界にくいいってきたという自

覚があるからだ。その自覚のぶんだけ、年は若くても、たぶんかれは古いタイプの芸人なのである。

すべてのことばはコピーにすぎないという認識は私にもある。いさぎよく、そう思いさだめてしまうことのあたらしさにもこころひかれる。でも私としては、できれば、そのあたらしさのさきをのぞきたい。切れ味のいい一行なんて、どうってことない。

●

「病院につれてってくれたのはドーウラさん。おれと反対に、この人はまた痛みにたいして極端にすなおで、どこかがちょっとでも痛むと、すぐ病院にかけこむ人なんだね。だから高円寺周辺の病院にかんしては、医者や看護婦にたいする評価がきわめて正確なわけ。それで早稲田通りぞいの佐口整形外科というところにつれていかれた。医者は院長ひとりで、感じのいいおばさんの看護婦さんがふたり——まあ、典型的な町医者なんだろう。そこでもぼくは、どうもネンザをこじらしたらしくてと申告したんだけどね、そう信じてうたがわなかったから。ところが……ツーフーだった。

思わず、ギャッ！　と叫びそうになった。おれの判断はただしい、ただ治療の仕方だけがまずかっただけだと思ってたのに、その根本がかんたんにくつがえされたんだから。

しかもさ、信念体系の転覆っていったって、ぜんぜんドラマチックじゃないじゃない？　ちいさな診察室で、おだやかな五十がらみのお医者が、ツーフーですとさらっと陽気にいっただけで、おれはただしい、ひとりでなんでもできるんだという思いこみが、一瞬にしてドカッとくずれちゃった。だったら、おれはこの三週間ちかくも、毎日、いったいなにをしてたんだろうとボーゼンとした。おおげさにきこえるだろうけど、こりゃやばいぞ、おれの生き方はまちがってたのかもしれないぞ、と瞬間に感じた。

生き方といったってさ、そんなこと、じぶんではっきり意識してたわけじゃないよ。むしろ医者にツーフーですといわれたとたんに、ああ、おれはこんなふうに生きてきたのかということがわかったんだね。

このお医者——佐口センセイね、なかなかおもしろい人。最初の日、患部に太い注射をした。その途端に激痛がきて、ウムッとうめいたんだね。ところが、それはチンツー・ショーエン剤で、ほんとなら即座に痛みが消えるはずだったらしい。なのに、かえって

痛くなったんで、センセイ、ちょっとあわてたらしいんだ。あっ、まずいことしたかな、ツノさんから電話がかかってくるんじゃないかなと心配だったと、つぎにいったとき、そんなこと、ついチラッといっちゃうんだ。あんまり率直なんで、びっくりした。

大学病院なんかの医者だったら、患者にたいして、もしかしたら私はまちがってたかもしれない、それが心配でまんじりともしなかったなんてこと、ぜったいにいわないんじゃないかと思うぜ、おれは。どんなに不安でも、じぶんの権威をまもって、私のやることにまちがいはないって顔をしつづけるだろうと思うけどなあ。

ツーフーとはなにかについても、写真や模型をもってきて、ていねいすぎるほどていねいに説明してくれた。じぶんの治療の方法についても、どこが内科的な治療とちがうかとか、この薬はかならずきくけど、なぜきくのかがよくわかってないから私はつかわないとかね。血液中の尿酸値がたかくなって、粉ガラスみたいに結晶して、それが骨のつなぎめにくっついて炎症をおこすのがツーフーなんだってさ。坂田明さんのおやじさんのばあいは、粉ガラスじゃなくコンペイトーといわれたらしい。「国歌を考える会」コンサートのあとで、そういってた。

そういう循環系統の病気だから、食事制限をやられる。くいものをABCDと分類された表をわたされて、これはいい、これはよくないとか指示される。おれも覚悟をきめて、わかりました、なんとかやってみますと帰りかけたら、まだセンセイが小声でなんかモゴモゴいってるのね。

よくきこえなかったから、「は？」とききかえしたら、いやね、じつをいうと、いったんツーフーになってしまったら、食事制限ははたいして意味ないみたいなんですよ、というのね。まったく関係もないという説もあります。酒もそう。せいぜいビールをのんで、尿をたくさんだすようにしてくださいとかね。それまでさんざん人をおどかしといて、すぐまた、それをひっくりかえしちゃうんだ。その程度の病気だということなんだろうけど、おもしろかった。アンチ・クライマックス。おれはああいう人はすきだね。

おや、爪がのびてるよと、のびた爪をパチパチ切ってくれたりね、どの患者にもそうしてるから、待合室の人がなかなかへらない。でも、みんなそれになれてるらしくて、のんびりと待ってた。だいたい近所のじいさんばあさんばっかりだから、時間があまってるんだろうけど、町のお医者としては理想的なタイプだと思った。いや、町にかぎらないな。もし医者がみんなああ

いう人だったら、おれの医者ぎらいはすぐやめにしていい」

●

そんなわけで酒はやめない。新宿の「だったん」で木島始さんと八巻美恵さんと飲んだ。木島さんが、いま手もとにいくつか詩があるよと、あとでそれを送ってくれた。この号では、いろんな人の話をテープにとって、いろんなスタイルでそれを文章におこす実験をやってみようと思ったのだが、途中でだめになった。あわててじぶんでじぶんにインタヴューしてみた。じぶんのなにかがボキッと折れた感じがある。こともあろうにツーフーごときでと思わないでもない。とりあえず、それしかなかったのでね。（津野海太郎）

水牛通信　毎月1回10日発行　1985年4月10日発行　通巻69号　1980年5月23日第三種郵便物認可

編集後記

前号の後記で、柳生弦一郎さんは「つのさんが足をグリコしたので……」と、うまくごまかしてくださったが、別記のとおり、グリコではなくして、じつはツーフーだったのです。金持ジジーの伝統的なやまいですね。

もっとも、いまの金持はバランスのとれたヘルシーな食生活をおくっているから、けっしてツーフーなどにはなりません。モツヤキにショーチューといったメニューが、いちばんわるいのです。それならば、おもいあたるところ、きわめて大です。すくなくとも水牛周辺には、小生以上にツーフーになる可能性のつよい人物はみあたりません。

急に編集担当をかわってもらった柳生さん、ありがとう。通信はじまって以来の、ドギモをぬくできばえでした。「50の祝」はぜんぶヌリエしました。三月三日、田川律さん生誕半世紀の祝宴、於平野家――あたまのページの人物、あれがその田川さんなのね。

次号は八巻美恵さんの担当です。四月の末には、平野甲賀さんのブック・デザイン集成『装丁術』（仮題）が出版される予定。

（津野海太郎）

※予約講読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名　水牛編集委員会
口座番号　東京四―九一七九二
購読料　一年分三〇〇〇円（送料共）
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

※本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二―三五五七
ブックイン（阿佐谷）☎三三〇―七八九七
信愛書店（西荻窪）☎三三三―四九六一
ワンラブブックス（下北沢）☎四一一―八三〇二
アール・ヴィヴァン（西武池袋店12F）
カンカンボア（西武渋谷店B館B1）
ストアデイズ（六本木ウェイブ4F）
名古屋ウニタ書店　☎七三一―一三八〇

水牛通信　第七巻第四号　一九八五年四月十日　定価二〇〇円　発行人＝堀田正彦　発行所＝水牛編集委員会　〒154 東京都世田谷区新町2―15―3八巻方　電話〇三（四二五）九六五八　振替口座東京四―九一七九二　印刷所＝㈱トライプリントショップ